

市場経済システムの歴史⑥

法政大学 経済学部教授 (客員) 渡部 亮

1500～1700 年の 200 年間に続く次の時代は、1700 年から 1850 年までの 150 年間である。この時代には、民主主義革命と産業革命という二つの革命が起き、封建君主制や教会神権制が後退して、個人の自由や平等を重視する考え方が生まれた。二つの革命の発生によって、欧州の中心地は、南欧から西欧、その中でも英仏へ移動した。

英国では、1688 年の名誉革命によって、国王と議会との間に融和関係が生まれ、政治的安定が醸成された。その結果、民間の商業活動が促進され、市場経済システムの制度インフラも整備され始めた。1688 年にロイズ保険が設立されたあと、1694 年にはイングランド銀行が設立された。また 1698 年には、商品取引所に隣接したジョナサン・コーヒーハウスに証券ブローカーが集まり、気配表が配られて証券取引がスタートした。この当時、共同出資会社が増加し始めたことが証券取引を促進したが、取引の大半はまだ国債であった。その後証券取引は、1773 年に専用の建物に移動し、1801 年になって会員規則を定めた組織として、ロンドン証券取引所が正式にスタートした(注)。フランス革命後、大陸欧州の証券取引が混乱したことも、ロンドン市場の発展を助けた。

(注) 前回の本欄で、「ロンドン証券取引所が 1688 年に設置された」と記しましたが、記述が不正確であったため、上記のように訂正します。

レッセフェールの起源

1500～1700 年の 200 年間で、国民国家の形成期であり、国家主導型の重商主義 (mercantilism) の時代であったのにたいして、1700～1850 年の 150 年間は、民間主導の経済自由主義の時代であった。この時代の経済自由主義は、重農主義 (physiocracy) と呼ばれた。physiocracy の physio-は「自然」を意味するギリシャ語に由来し、

もともと農業の意味はないのだが、当時の主要産業が農業だったためか、日本の経済学者が重農主義と翻訳した。

重商主義のもとでは、政府の指導者が中央集権的に意思決定したが、経済自由主義 (重農主義)のもとでは、多数の市場参加者の判断や工夫が重視された。独立した個人による意思決定が経済全体の利益につながると考えられ、いわゆる「見えざる手」の論理が確立して、官の時代から民の時代へ移行したのである。

この経済自由主義の極端な形が、レッセフェール (自由放任主義) である。レッセフェール (laissez-faire) は、ルイ 14 世時代の仏財務総督ジャン・バティスト・コルベールが座談で使った言葉を、1750 年代の地方行政長官ヴァンサン・ドゥ・グールネーなどが、経済自由主義の普及と広報に利用したもので、それが重農主義にも影響を与えた。血液の流れを参考にして経済循環を解明した、フランスの経済学者フランソワ・ケネー (もともとは外科医) が、重農主義経済学の元祖とされている。フランスを旅行中のアダム・スミスが、それに触発されて『国富論』(1776 年)を著し、英国における経済自由主義の思想的背景を形成した。本来であれば、let us do とか allow us to do とか英語に訳すべきところを、フランス革命の印象があまりにも強烈だったためか、そのまま英語になってしまった。なおケインズによれば、laissez-faire を最初に英語に持ち込んだのは、ジェレミー・ベンサムかベンジャミン・フランクリンであり、スミス自身が使ったわけではなかった。

レッセフェールの考えは、フランクリンによって米国に持ち込まれ、建国以来、民間経済への政府不介入や低税率など、米国の経済政策の大原則となった。まだ経済政策手段も確立しておらず、

政治的にも不安定な状況では、自由な経済活動が自然に秩序を生むという考え方は、受け入れやすかったのであろう。現代において「市場ファンダメンタリズム」などと批判されるのも、そうした事情によるものかもしれない。ただしケインズは「完全なレッセフェールと完全な全体主義の間に、中間コースが存在する」ということを何回も指摘している。各国の市場経済システムには、歴史やカルチャーの違いによって、さまざまな形態があり得ることを忘れてはならない。

市場はR&Dの宝庫

さてアダム・スミスが『国富論』を著したのは1776年であり、まさに第一次産業革命が進展し始めた時代であった。スミスの関心も分業による生産性向上と、分業生産された商品を取り引きする市場機能の評価にあった。スミスは、人間には交換によって喜びを感じるという本能的衝動があり、その交換衝動が市場取引を引き起こすと考えた。そして市場取引が進むと、つぎには分業による専門化が促進され、その専門化によって技術が発達すると考えた。『国富論』には、工場のバルブ操作の専門家になった少年が、ピストンのシャフトの動きとバルブの開閉を自動的に連動させる改良技術を考案するという逸話が紹介されている。スミスは、発達した市場において取引に規律を与えるものは何かといった問題にも取り組み、「見えざる手」という自律的秩序の存在を主張した。ちなみに現在の20ポンド紙幣の裏面には、スミスの肖像と、当時の工場における分業の様子が描かれている。

スミスを始めとする古典派経済学者は、ロックやルソーが提唱した個人の自由と、社会全体の福利向上という、二つの思潮を統合する役割をはたした。つまり、市場経済取引によって自由と平等が同時に達成されることを経済学者が論証し、各人が自由に自己の利益を追求すれば、それが社会全体の利益につながると考えた。

スミスはベーコンとは違って、政府の力よりも市場の力を、また科学者の知識よりも生産現場の職員の知恵を重視した。その意味で、スミスはボトムアップの経済自由主義的発想をした。市場の

存在が、分業による専門化を通じて生産現場の技術を促進し、それが結果的に学問的知識や科学的進歩をもたらすと考えたのである。

アダム・スミスの時代には、オックスフォード大学やケンブリッジ大学が研究教育面で停滞し、教員の職や地位は、英国教会の牧師に任命される前の踏み石に過ぎなかった。スミスも、グラスゴー大学からオックスフォード大学に移ってきてモラルの低さに失望し、フランスにわたって経済自由主義（重農主義）に接した。こうしたこともスミスの現場指向と市場指向を高めたようである。

民間主導型経済

1780年ころから1840年ころまで続いた第一次産業革命に関して重要なことは、それ以前の時代に、すでに国民国家が成立しており、法制度、貨幣制度、統一の言語などの制度インフラの基礎が形成されていたことである。民族国家としての文化の共有も、市場経済に不可欠な人間相互の信頼感を醸成した。こうしたことが、新しい市場経済システムを支えたと考えられる。

もうひとつ重要なことは、特に英国の場合、産業革命も農業革命も、政府の助成金によるのではなく、民間の自助努力によるものだったという点である。政府は、測量による陸上地図の作成や、大洋航海に必要な計時のための海図作成には尽力したが、科学技術の振興は、それによって利益を受ける民間人の役割だとされた。この150年間を総括するメイン・イベントとなったロンドン万国博覧会（1851年）も、民間からの寄付金が財源の大半を占めた。（以下は次号に続く）

わたべりょう（法政大学教授）